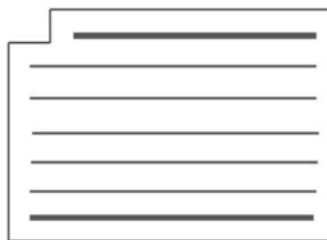


## パラグラフの論理構成

### ●英語圏での Academic Writing の思考

英語圏では、論説文を書く際には書き手(=筆者)は各パラグラフで1つの主張(=一番言いたい意見)を述べなければならない。さらに、その主張を読者全員に100%納得してもらい、いかに自分の主張が正しいものかを裏付けるための具体的・客観的なデータを挙げなければならない(=論証責任を果たさなければならない)。

### ●基本的な論理構成



① Topic Sentence (主張/意見)

O

② Supporting Sentences (裏付け)

R

理由

E

具体例

③ Concluding Sentence (結論=再主張/一般化/提言)

O

#### 【解説】

英語圏では幼少期に主張や意見を述べる際に OREO の構成にするよう教えられます。これはお菓子の OREO になぞらえたもの(上下が黒でクッキー, 真ん中に白のクリーム)で, Opinion→Reasons / Examples→Opinion を表します。意見→理由/具体例→意見の流れで, 最初に自分の意見を述べたら, 必ず理由や例を述べるよう指導を受けます。述べ終わったら結論としてもう一度意見を繰り返すという流れです。実際には, 最後の O(結論)が抜けることが多いため, ORE という流れが多いです。学年が上がると, PREP と呼ばれるようになります。P は Point (主張, 要点) で Opinion より強い根拠を感じられる語です。さらに, 学年が上がると, Topic Sentence→Supporting Sentences→Concluding Sentence と呼ばれるようになります。いずれにせよ, O や P や Topic Sentence を提示すると, 理由や例を述べる責任【=論証責任】が生じるという文化的思考があるのです。

●英語圏の人々と話していて「昨日試験が大変だったんだ～」というようなことを言うと, 必ず「何で?」「例えば?」を求めてきます。日本人はこの一言である程度読み取って, 例や理由を推測しようとはしますが, 彼らは論証責任という思考を持っているので, 主張をするなら, 具体例や理由を欲するわけです。

### ただし, 基本的な構成はあくまでも基本

①→②ではなく, ②→①という英文構成も多く存在します。特に第1パラグラフは「一般論の導入→具体的説明→主張」という流れを踏むことが多い。第2パラグラフ以降でも②→①は意外にも登場します。国語力で解決することもできますが, 英語は見た目①か②かの判断が可能。見極めのための表現を頭に入れておきましょう。